

総合討議の記録

【内田】 皆さま、貴重なお話をありがとうございました。それでは、御発表内容についての補足や質問を通じて、近世を中心とした時期の遺跡の顕彰、これの主体とその背景、動機、地誌の編纂など全体的に整理しながら総合討議を進めてまいりたいと思います。

【内田】 まず、鈴木先生の御発表についてご質問等ございますか。

光圀の事績、侍塚古墳の保護について

【小野】 鈴木先生の御発表、大変勉強になりました。徳川光圀について知らなかったことをいろいろ教えていただき、ありがとうございました。徳川光圀がおこなった多くの文化財保護に関する事績として、典籍類の所在地を複数にすることによるリスクの分散だとか、資金の伝達として小判を後世に残したのではないかというお話だとか、発掘で見つかった遺物を元のところに戻して保存をするだとか、遺跡の土地を公有化することで保存を確実にするとか、あるいは耐震補強のようなこととか、現代的な意味でも非常に意義のあることを既にこの時代におこなっていたということについて、本当にすばらしいなという感想を持ちました。

少し気になったのが、上侍塚・下侍塚は、当時は

上車塚・下車塚と呼ばれていたとおっしゃられていたことです。一般に、車塚というのは前方後円墳の名前として使われます。上侍塚・下侍塚については、前方後方墳を前方後円墳だというふうに認識していたのか、それとも、認識せず何となく車塚という名前がつけられていたのか。もし分かっていたら教えてくださいたいと思います。

【鈴木】 おっしゃる通り、車塚というのは、前方後円墳の呼称としてよく使われるようです。ただ、光圀自身、この古墳を発掘した主目的は、先程お話ししたように、那須の国造韋提という人のお墓であるという証拠を見つけたい、というところにあったのです。したがって、この古墳の形態が前方後円だったか前方後方であったか、といったことはほとんど関心がなかったらと思うのです。

かつて見た残されている当時の発掘記録では、「後円」ではなくて「後方」のような形になっていたように思いますので、その名称はなくても、ご質問のように、結果的には「前方後方墳」の発掘ということにはなるわけでしょう。

【小野】 そうすると、発掘調査の成果が本来の形というものを明らかにしたと、そういうことになりますね。



【鈴木】 はい、結果としてそういうことになるかと思いますが。この車塚、あるいは侍塚と呼ばれていた古墳がきちんと測量されて、前方後方墳だと確認されるのは、ずっと後世、近代になってからで、考古学の研究者である友人の話では、前方後方墳という名称が最初に使われたのは、大正年間、『島根県史』の記述だということです。ともかくここで重要なことは、光圀が常に将来、この古墳を研究する者がでてきた時に備えて、当時の発掘の模様や成果を図面をつけて記録し、後世に残そうとした精神だと思います。その態度が、これも結果として、「日本最初の学術的発想に基づく古墳の調査」などといはいわれるようになったわけです。ちなみにこの下侍塚は、その形態の古墳の中でもっとも原形をよく保っていて、「日本一美しい古墳」ともいわれて有名です。

【小野】 ありがとうございます。

【内田】 侍塚古墳については、ちょうど去年発掘調査が行われて、大田原市なす風土記の丘湯津上資料館で、「日本考古学発祥の地―徳川光圀侍塚発掘330年を記念して」という特別展をおこなっていました。小畑さん、補足ございますか。

【小畑】 この展示を企画した学芸員さんとお話をする機会を頂きまして、学芸員さんのお話では、上侍塚古墳と下侍塚古墳の周辺には小規模な古墳がもっとたくさんあったけれども、それらの一部は畑地にするために壊されてしまったようで、最近の発掘調査によって、そのような調査結果が出ているとのこと。そのような中、なぜ2つの古墳が残されたかということについては、1つは両古墳が非常に大規模で、葺石とか版築が残っていて、畑地にするのが困難であったということ。もう1つは、やはり光圀が保護した古墳だからということで残されたのではないかと学芸員さんがおっしゃっていました。

現在、大田原市ではさらに調査が進められていて、2つの古墳を中心にしたまちづくりを目指しているらしいということです。その一環として、地元

の小中学校の児童・生徒の皆さんが、積極的に地域の方々と一緒に古墳の松の木のこも巻き、こも外しや、清掃などを行っているようです。作業をしている子供たちの姿が目につかんで、すばらしいなと思い、ご紹介をさせていただきます。

【内田】 ありがとうございます。ほかにどなたかご質問はございますか。

羽賀先生、お願いします。

光圀の時代の文化財保護の背景

【羽賀】 鈴木先生のお話、大変面白く聞かせていただきました。特に、私も水戸光圀の事績については興味がありまして、今日のお話を聞いて、その全体像みたいなものがよく理解できました。1つ疑問は、元禄前後の時期になぜこういう人が出現したのかということです。多分、小光圀とかそれに類した人たちはたくさんいると思うのです。そうすると、こういう光圀が象徴するような仕事なぜ元禄前後の時期に出現したのかというその背景について、どう考えればいいのか。仕事の中身が広範で、かつ坊津まで家臣である佐々が行ったということがあって、全国的な規模で、しかも調査も周到に行って、そして保存をするという大規模な文化事業を彼がやったということの理由というのは、どのように考えればいいのでしょうか。

【鈴木】 そうですね。端的に言えば、光圀はわが国の将来に責任をもたなければならない、という意識を強くもっていたからだと思います。『大日本史』の場合、林家の『本朝通鑑』への対抗心、つまり編年体の『本朝通鑑』に対して、司馬遷の『史記』にならって、本邦初の紀伝体の史書を編纂しようという思いが光圀にあったことは確かです。また同時に、当時、江戸などで大火が頻発していて、今のうちにできるだけ史料を集め、史書を編み、あるいは文献をさがし、厳密に校訂して確かな史料を残しておくなければ、後世の歴史研究に大きな支障をきたす、という危機感から発した使命感・責任感によるところがとても大きいと思うのです。『大日本史』ばか

りでなく、先程お話したような古墳の発掘や古典の校合など、みなそうした精神の表われでしょう。

『大日本史』の本文には、文章が一段落するごとに必ず、その出典、たとえば『古事記』であるとか、『吾妻鏡』（『東鑑』）であるとか、を明記しています。また説が分れているような場合、ここではなぜこの説を採用したのか、その理由についても記しています。こうした配慮もやはり後世の史書編纂や歴史研究に役立てたいという意図に基づいたものと考えられます。将来のために今なにをしておかなければならないか、という意識ですね。

さらに広い視野に立ってみれば、長い戦国時代が去って、平和な時代が到来したことにより、これから新しい社会をつくり上げていくためには、文字通り「彰往考来」、過去をふり返って将来を考える、という歴史意識をもつ必要が生じ、この歴史意識をベースとして、『本朝通鑑』をはじめ、山鹿素行の『武家事紀』、新井白石の『読史余論』などの秀れた歴史書が書かれたので、『大日本史』もそうした時代精神の中での事業だったと思います。

話は急に飛びますが、光圀は名木・古木を観賞することが好きだったようで、旧水戸藩領の村には今でも、これは黄門さまのお手植えの桜だ、というような光圀由来の話を伝えているところがいくつもあります。光圀自身が、この名木を残せ、あの古木を残せ、と言ったというはっきりとした記録などは見当たらないようですが…。これから注意して調べてみたいと思っていますところですよ。

【内田】 ありがとうございます。近代に史蹟名勝天然記念物保存法ができてくるときに、植物学者の三好学が大木、名木の保存をしますが、それよりも前に光圀が名木、古木に関心をもっていたというのは、とても興味深いことです。

光圀による遺物の現地保存

【内田】 ありがとうございます。それと、先生の御発表の中で嗚呼忠臣楠子之墓の建造について述べた部分（本書10頁）ですが、光圀の顕彰の前に、尼

崎藩主の青山による顕彰というのが行われていたとあります。光圀よりも40年ぐらい早くに顕彰をしています。先ほど鈴木先生がおっしゃられておりましたが、光圀は青山が建てた五輪塔などを結局埋めてしまうということで、これについては私も、光圀のこの行動ってどう考えればいいのだろうなと思っていましたのだけれども、五輪塔などを下に埋めるということは、保存の意味合いはあるという御指摘でした。なるほどと思って理解ができました。『湊川神社史』を調べていただきまして、ありがとうございました。

【鈴木】 例えば、光圀の「梅里先生之墓」という寿藏碑ですね。光圀のお墓の少し手前の方がったところにあるのですが、自分で揮毫して、この碑を建てて、そしてその下に自分の衣冠束帯を埋めているのです。そういうことから私が考えたのですが、やはり下に埋めるというのは捨ててしまうという意識ではなくて、むしろ長く保存し、記念としてそこに確実に残していくという意味なのではないかと思うわけです。

小坏さんにお尋ねしたいのですが、弘道館記碑がありますよね。その下に、誰も掘っていませんが、恐らく私は九代藩主の斉昭の何かの記念物が、弘道館記碑の下にあるのではないかと想像しているのですが、いかがですか。

【小坏】 私も鈴木先生と同じような想像をしています。弘道館記碑の近くに種梅記碑という石碑もありまして、それが東日本大震災で少し傾いてしまい、復旧工事の際に建て起こしのために礎石を移動しました。この場所も特別史跡の範囲なので、それ以上掘れなかったのですが、礎石の下の方に何か埋蔵されているような形跡がございましたので、恐らく弘道館記碑の下にも何か埋められている可能性は高いのではないかと思います。

【鈴木】 弘道館記碑は、しっかりした版築工法の基礎の上に立っていたのですが、それでも大震災で随分傷んでしまいました。その壊れて粉々になった弘道館記碑を修復した際、当時文化庁の調査官でい

らっしゃった内田さんと、小坪さんと私とは、いわば詰め作業をすることになって大変苦労しました。その下に何かあるのではないかと、掘ることも考えなかったわけではないですが、固い版築工法の基礎も文化財ですから、それを壊して掘ってしまったのでは元も子もないということで、そのままにして、戦災ですでに損傷していた箇所を含めて、できるだけ斉昭が建てた時の石碑の形に戻そうと努力したわけです。

遺跡に対する地元民の意識

【内田】 ありがとうございます。続いて、「近世尾張藩における史蹟の保存と顕彰」について、羽賀先生、何か補足はございませんか。

【羽賀】 最後に気になったこととして、清洲城跡もそうですし、ほかの尾張藩の事績もそうですが、僅かな痕跡が残るということがあるのですね。『名所図会』の中に出てくるような、本丸の跡に樹木が林立して、そこだけが田畑の開発から残されてくるという痕跡。他の城跡も、周辺が田畑化するにもかかわらず、ある程度のもので残していくというようなことがあります。そのような、地元の人から遺跡がどういうふうに見られて、ここだけは守り切ろうという感覚があったのかどうかということ。これはなかなか史料的に確認することができないので、推測するほかないのですが、その城跡あるいは史跡の持つ地元民にとっての価値というか、見方というか、その辺りについて、少し考えていきたいなと思っています。

【内田】 ありがとうございます。よく古代の官衙跡だとか、あとは多賀城などもそうだったと思いますが、貴人の住んでいたところというように伝承されているので、鉄を入れることをためらった、と言われていたところはありますね。そういう履歴がどうなったかということは、非常に興味あるところです。

【羽賀】 今、内田さんがおっしゃったように、やはり、ある種のタブーとしてここだけは触ってはな

らないというものが、最終的には残ってくるのだと思うのです。そのタブーの場所にその後の歴史考証で確認された史実というか、その段階での史実を記録として残して、記念碑とかあるいはその他の象徴的なものを作っていくという、そういうことがあって、タブーとしての遺跡みたいなことは、やはり考えていくべきだと思います。

【内田】 ありがとうございます。羽賀先生のご著書『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識』（名古屋大学出版会、1998）中でも、中世あるいは近世の初めの頃までは、遺跡に対する人々の感覚が「畏れ」、タブーとしてあって、それがやがて学問的な営為によって見方が変わってくると指摘されていたと思います。そういったことにつながってくるのでしょうか。ほかに質問はございますか。

郷土史研究のはじまり

【竹内】 羽賀先生の『史蹟論』も拝読し、今回の報告もとても刺激的な内容でした。

これは羽賀先生に限った質問ではないかもしれませんが、例えば羽賀先生の報告の「清洲城墟碑」の文面に「駅長林某」というふうに出てきまして、これは地元の本陣を預かっている大庄屋のような人なのではないでしょうか。そういう人が、地域の遺跡に対するイメージの代弁者みたいな形で示される。ほかの事例でも、那須国造碑のところで「庄屋大金」という方が出てくるなど、こうした直接、藩に関わらないような大庄屋層レベルの人たちが、地域のそのような情報を吸い上げる大事な役割を果たしているのかなと思いました。これに関して地域差や時代差があるのか、分かる範囲で教えていただけますか。

【羽賀】 ありがとうございます。今の問題は、郷土史の成立という問題と関わってくると思います。それは藩の儒者たち、つまり知識を集積できるような人たちが地域の歴史を探り出してしくプロセスです。文献のみならず地元の人たちに聞き取りをしたり、巡検することが大事になっていく、あるいは村からの書出、差出帳が重要になってくるという流れ

があります。これに触発されるような形で、地元の人たちが周辺の歴史遺跡に関心を持って、先ほど紹介しました武田という人物、あるいは林家、あるいはほかのこの地域の清洲の名望家の人たちがその後の遺跡の保存と顕彰に中心的な役割を果たしてきて、そして、郷土史をつくり上げていくということになると思うのです。

先ほど、一瀬さんの大宰府跡に関する報告でも非常に面白く聞いたのは、天明期以降の、あるいは明治期の奥村玉蘭とか高原善七郎という人物。彼らが郷土史家なのかどうか、こういう郷土の歴史を、自らの力と、藩なり中央が蓄積した知識とを吸収して合わせながら、つくり上げてくる段階が、主として文化・文政期に出て、その後おおよそ百年たつと、大正期の郷土史ブームにつながっていくのではないかなと考えています。

【鈴木】 私もそれは感じておまして、水戸藩では『大日本史』ばかり注目されることが多いですが、私が江戸時代中期を対象とした『水戸市史』の中巻(二)を分担執筆したときに、「郷土研究の進歩」という題でこのことを取り上げました。郷土の研究をまず地理的な分野と歴史的な分野とに分けて考察し、そのあと両分野を統合するかたちの著述として『新編常陸国誌』を取り上げてまとめたのですが、主として民間人による地道な郷土研究の成果を掘り起こす努力が水戸藩の研究の中でおろそかになっていました。これを反省して、「郷土研究の進歩」の項を執筆したわけですが、この方面の研究を今後もっと進めなければならないということを、今、羽賀先生のお話を伺って改めて考えた次第です。

【竹内】 ありがとうございます。そうした郷土研究の担い手たちは地域のトップに位置した庄屋層だと思うのですが、それ以外の人たちの歴史的な遺跡に対する関心は、庄屋層とほぼ同じと考えていいのか、全然違うものなののでしょうか。史料からはあまり見てとれないかと思いますが、何か分かることがあれば。

【羽賀】 今日紹介した『名所図会』には、行き交

う人が通り過ぎるばかりであるという叙述の半面、先ほどの紹介した桶狭間の絵図のように、非常に関心を持って旅人が見るということも一方であるのです。ただ、地元の百姓あるいは町人たちがこういう遺跡、残された歴史に対してどう考えていたのかは、やはり史料的になかなか分からないというのが実情ではないかなと思います。

【内田】 一瀬さんはどうでしょうか。

【一瀬】 ほとんど羽賀先生のお答えと本当に重なるところなのですが、やはり庄屋層などは、いわゆる民間における知識層で、書出の提出がきっかけにというケースもそうですし、そもそも歴史とか古典とかそういうものを学んだ人にとっては、そのような意識が芽生えてくるのかなと思います。あとは、地元の百姓の人々にとっては逆に、大宰府でも、平泉もそうだったと思いますが、礎石というのは自分たちの耕作に邪魔になりますよね。どちらかといえば、そういう立場なのかなと思います。それと、大宰府に訪ねてくる旅人にとっては、せっかく行くからここもあそこもという中に大宰府はやはり入ってきます。民衆の中でもいろんな階層、立場の人がいて、一概には言えませんが、遺跡に対する関心というのは本当に様々あったのではないかと思います。

【内田】 ありがとうございます。佐藤さんはいかがですか。

【佐藤】 平泉では、さきほど18世紀の後半に民間の相原友直という人が平泉についていろいろ記している「安永風土記」をご紹介しました。相原友直の著作の特徴というのは、時々「土俗に言う」と言っていて、土俗、俚俗を引用している点です。要は書かれたもの以外に、そういう口承伝承のようなものを資料として使っているということに特徴があるということで、先ほど一瀬さんもおっしゃいましたけれども、いろんな人が平泉にもいたのだなと今のところ考えております。

【内田】 ありがとうございます。藤本先生はいかがですか。

【藤本】 先ほど私は、自分の話の中では『名所図会』のマイナス点を申し上げたのですが、それは一部を誇大に言った観がありまして、そもそも『名所図会』の名所というところの言葉の意味で、これは名所というのは2つの側面があって、歌で有名なところの名どころという言い方で、近世の前期に成立する用語だと思います。それと同時に、18-19世紀に名所といった場合の中身に、地方特産品などを挙げるような内容が入ってきて、名所という概念が大分変わってきていると思うのです。もちろん、よそから来る人、旅行者が必ず『名所図会』を見てくるということの影響がかなりある。それに加えて、地元で本屋さんが本を出したら売れるようになる。売るに際して間違えた部分があって、山の上に建物を書いては困るよ、という話をしましたが、それを含めて全部、地元に関する歴史までも知りたいという要望があるということ。これは『名所図会』がかなりの地域で広がっていくことから、民衆の地域のいろんなものに関する様々な情報について、清濁含めて全部を吸収しながら民衆の知識といいますか、歴史ができてくるのではないかなという気はいたします。

顕彰される遺跡の種類の違いと政治的思惑

【藤本】 それともう1つ、お尋ねしたいのは、尾張藩における史跡の対象が、やはり近世初期の権力をつくる、近世権力の発祥地らしいということです。同じ近世に尾張と対抗した紀州としては、残念ながら権力から征服された場所、被征服地なのですね。そういう意味で同じ顕彰といっても、尾張藩のような戦跡などの顕彰というのは紀州ではあまりありません。むしろ違う勢力下だったという見ることができるかもしれません。尾張の顕彰碑等の運動の特徴は、やはり尾張の特性を示しているのではないのかという点について少し意見をお聞きしてみたいです。

【羽賀】 確かに尾張の特性は、はっきりあると思います。ただ、天野にしろ、松平君山にしろ、中国

を含めてあらゆる知識を集積して、そして1つの世界観をつくっていく中で、歴史もあるし、古典学もあるし、本草学もあります。尾張の学問の特徴は古代学というふうに言う方もいますが、古代の典籍研究が非常に盛んな地域です。国学が非常に盛んになる、あるいは神道学が非常に盛んになる地域で、それで本居宣長を後援する人たちも尾張の中にたくさんいるという特徴もあります。そういう意味で、尾張の徳川家の学問の蓄積は、蓬左文庫という藩の文庫を基盤にしてつくられてくるものですが、そういう学問の発展史の中で史跡の保存、それから地誌の編さんというものがある。そして目の前にあるのは戦国の様々な遺産を取り上げていくということになっていくのだらうと思います。

【内田】 ありがとうございます。学問の発展がベースにあって、ただ、それでも、藩政の中ではやはり顕彰というのは政治的な思惑もあるということでしょうか。

【羽賀】 当初、古城絵図などの編集の際には、軍事的価値とか地理的状況みたいなものを一生懸命理解するのが武士として、藩士としての務めだ、という言い方で説明されています。ただ、その後の動きの中で政治的な意味合いで、それを使って政治的な支配、統治しようという意図はあまり表面には出てこないです。むしろ、自分が統治している領域のあらゆる事物をつかまなければならない、掌握しなければならないという、別の意味での政治的な思惑はあると思います。ですから、崩れつつある統治をもう一遍再建するには、あらゆる事柄を掌握して、それを基にして判断すべきだという、そういう政治の方向性はあるだらうと思います。

【内田】 直接的に統治とかいうのが目的ではなくて、そのベースとしての科学的な理解というかが目的にあるという、そんな形になるのでしょうか。

【鈴木】 そうすると、村明細帳とか村鑑とか、そういう史料が農村支配の重要なデータになりますよね。それと同じような意味合いですか。

【羽賀】 そうですね。

大野城跡と水城跡の取り扱い

【内田】 次に、3つ目のご報告「福岡藩における大宰府跡の保護・顕彰」について、いかがでしょう。

【小野】 大宰府跡を福岡藩が保護・顕彰したというお話は非常によく分かりましたが、今、大野城と水城が大宰府と一連の史跡として理解されています。大野城と水城については、福岡藩はどういうふうな見方で、実際にどのような保護等をおこなったか、その辺り少し教えていただければと思います。

【一瀬】 大野城跡については、特に意は払ってないように思われます。そういった観点からの史料を確認はしたことなく、地誌類には当然記述はありますけれども、遺跡の保護等は特になかったと思います。それこそ文化・文政年間頃、19世紀頃に大宰府近辺の遺跡等を描き込んだ絵図が作られるのですが、それはあくまで民間で作られていて、そこに礎石の跡が幾つか、ここにあるよというのが記されていたりします。それに直接、藩が作成に関わったということは確認されていなかったと思います。

水城跡については、これも藩による直接の大宰府跡のような保護というのは取られていませんけれども、文化・文政の例でお話しした青柳種信は、水城についていろいろ詳しく書いている中で、やはり崩れていっているのでその措置が必要だということを言及はしていますが、藩が何かそれに対して手だてを講じたというのは確認できなかったと思います。

【内田】 ありがとうございます。大野城の発掘に携わっていた入佐さん、四王院はいつからどうなっていたのでしょうか。古代以来のところで、お寺ができてくるのですか。

【入佐】 観世音寺が麓にございまして、そちらのほうの活動が中世になると大きくなってきて、原山無量寺とか、そういったものができてくるかと思えます。古代においては、四王院は、新羅との関係が悪化したときに、朝鮮半島を見渡せるような非常に標高の高いところに築かれたと言われています。今、その遺構が残っていないのですけれども、そういう記述はあります。

【内田】 新羅との関係が悪くなってくるということとは、奈良時代という話ですか。

【入佐】 そうですね。700年代です。

伊達藩の顕彰の再検討

【内田】 ありがとうございます。そうしましたら、4番目の報告、「仙台伊達藩による平泉の遺跡の保護顕彰」についてです。

【佐藤】 2点だけ補足いたします。まず1つは、仙台藩による礎石移動の禁止について、農地との境界争いが絡んでいるのではないかとということを申し上げました点です。お示しした史料は毛越寺に出されているものです。実は礎石は、中尊寺にもあるのですけれども、中尊寺に対して出されてはいないのです。その後、除地についても同様に、中尊寺は一山境内なので農地と全然隣接しないのですが、毛越寺の場合は11坊が農地と入会になっていました。そのようなことが1つ大きな要因ではないかと考えているところです。

それともう1点は、植林について、杉等を植林しているということを再三申し上げましたが、杉をもって古跡いわゆる遺跡の趣を維持したいと言っているのは、主に中尊寺、毛越寺、そういった寺院の側です。一方で、藩のほうは御用木として供出を命じているようなところもあって、この辺りは、今までは植林は遺跡の保護の意味で藩がおこなったのではないと言われていたようなのですが、そうしたことも全くないわけではないのかもしれませんが、しかも松ではなくて杉ですので、いろいろな際に寺院境内を使って杉を植林して栽培していたということも、視野に入れておく必要があると考えます。

【内田】 ありがとうございます。毛越寺の植林については、伊達藩による保護顕彰の脈絡で語られている先行研究があり、今回、それも含めてご発表をお願いした次第でしたが、そういう御用木としての利用という側面があったのではないかとということでした。

遺跡を顕彰するための樹木の種類は、やはり松な

のかなと思います。賀茂真淵が藤原宮の大極殿跡について、そこに松を立てるといふうに書いています。それが、賀茂真淵の行動として顕彰として立てたのか、あるいは地元民が立てたのかが、私は文脈的に判断しかねましたが、いずれにしても、松は顕彰の意味合いがあるようです。近代の話になりますが、平城宮跡の第二次大極殿の跡には枝ぶりのいい松があったのですが、その後枯れてしまって、現在のような形で整備がされています。

松島の顕彰

【羽賀】 今日のご報告の本旨からはやや逸れますが、伊達家の先祖、あるいは政宗、あるいは松島、そういう史跡名勝に対する藩の保護顕彰はどのようなになっていますか。

【佐藤】 実は、伊達家全体については、まだ不勉強でそこまでお話しできる状態にはなっておりませんが、一般に言われることで申し上げますと、やはり四代の綱村、それから五代の吉村の代あたりの前に伊達騒動、お家騒動があって藩内がぐらつきます。その後の代の綱村、あるいは吉村は儒学をきちんとつくっていくということ、それから禅宗だけではなくて、黄檗宗についても随分力を入れたということです。この17世紀後半から18世紀の前半にかけて、いろいろとそのようなその後につながる施策といえますか、寺院の建立や、恐らく松島もそういったことがあったように思います。それから、先ほど鈴木先生のご報告で多賀城碑の覆いの話がありました。このようなことも一連の仙台藩の史跡保護、顕彰として考えていく必要があるかと思ったところです。

【鈴木】 そうすると、光圀も綱村がそういうことに関心があるということを知っていて、そのことが壺之碑（多賀城碑）を顕彰したいと光圀が考えるようになった1つの動機なののでしょうか。

【佐藤】 綱村、吉村はいろんなことをやって、かなり仙台藩が財政的にも厳しくなったということも言われているようですので、他藩にも知られていることと思います。

顕彰の意味で植える樹種

【藤本】 先ほど、松と杉の議論になりましたが、東海道松並木、街道に松を植えますでしょう。和歌山の東照宮とお城をつなぐ道にも松をずっと並べて植えています。それが戦時中に切られてしまいましたが、その根っこが出てきたのでその保存運動しています、なかなか広まらないのですが。それで松の意味は、公的な街道だとか、意味のある街道だということ、つまり荘厳化するという意味があって、それは権威づけとつながっていくのではないかと。その場合、日光の東照宮の杉並木は意味合いが違うのでしょうか。先ほど、杉に注目されていたので、どちらにも必要に応じてというか、うまく合うように植えたのか、その意味では同じではないのかなという気もしたので、その点を確認できたらと思います。

【内田】 確かに、日光杉並木、ありますね。松並木ではないですね。どうでしょう。樹木関係でご意見ございますか。

【佐藤】 平泉の状況ですと、今、日光杉並木と類似するのは、中尊寺の参道に月見坂という坂に杉並木があります。それは一種確かに荘厳な雰囲気というのを出していることは疑いないだろうと思います。ただ史料的には、いま一つ確認がしづらいようなところもあって、おそらく中尊寺の月見坂の杉並木は杉の状況からして17世紀の前半ぐらいの可能性もあるかと言われています。それと史料に出てくる先ほど少しまだ小さいからということでご紹介した内容は、17世紀の後半から18世紀の前半と、時代がずれている、という解釈もできるかと思いました。

【藤本】 松と杉の意味合いはどう違うと考えられますでしょうか。

【一瀬】 私も佐藤さんにお伺いしたいのが、藤本先生がおっしゃったように、街道の松というのは確かに九州でも街道には松を並木で植えたり、一里松というので結構松を採用するのですが、それは地域性とか気候とかの問題もあるのでしょうか。東北で街道の通常の並木というのはどういったもので、松を使う例は普通にあるのかどうか。

【佐藤】 基本的には松だと思います。無量光院跡の中に今、県道がありますが、それは奥州道中をそのまま使っているらしく、そこを発掘調査すると松の根の痕跡が出てきますから松だろうと思います。

保存顕彰の動きに共通する理由はあるか

【内田】 先に進みます。5つ目の報告で、「紀州徳川藩における名勝和歌の浦の顕彰－「望海楼遺址碑」・「奠供山碑」をめぐる－」に関して、藤本先生、補足はございますか。

【藤本】 2点あります。まず、水戸との関わりで、古跡調査を紀州藩でも藩主が寛文3年にやり始めています。寛文年間ぐらいに頼宣はそういう関心が非常に強くなっていくので、これが恐らく領内のものを把握しようという、もちろん保存の意味も含めて把握する領主の仕事であり、権威の源泉でもある、という意味なのかと思います。それで、紀州でもそのようなことがあって、これを敷衍して言えば、幕藩領主が一国内の統治ということでこのような政策を進めることはわかりますが、水戸のように対象が全国に及ぶというのはどういう意味なのだろうと、やはり問題が残るなと思います。興味深いです。

それからもう1点、私はどちらかというと、近世の後期にいろんな碑を設置したりすることは一定のイデオロギー性といいますか、幕末期に近くなれば権威の再編成というような要素につなげて考えてしまいます。しかし個別に見ると、それを相対化しているのではないかということを今日は申しあげたつもりです。その背景として、一般的な領主制の危機のようなことではなく、個別の理由、このときには隠居藩主だったので、それと違う勢力との対抗関係がかなりある。藩の中の騒動は基本的にあまり目立ってはいないのですが、そういう派閥の闘争みたいなことはあるので、その力関係をより有利にすること。この時期にお城の再建もおこなわれますが、そのような藩内の政治状況がかなり固有に関係しているのではないかという気がします。したがって、その時代を一般化したい衝動に駆られる一方、どこ

まで一般化できるのか、ということを議論する必要があると思いました。それだけ付け加えます。

【内田】 藤本先生、ありがとうございました。ご質問がありませんでしたら、時間にもなりましたので、これで研究集会を終わりたいと思います。ありがとうございました。

—— 了 ——